

茨木市立東小学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和3年10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

(領域ごと)

- | | |
|------------------|---------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | やや課題が残る結果であった |
| ②A話すこと・聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ③B書くこと | 課題が残る結果であった |
| ④C読むこと | 良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 課題が残る結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

やや課題が残る結果であった

(その他)

- | | |
|--------------------|-----------------|
| ・もっとも正答率の高かった設問 | 2 二 |
| ・もっとも正答率の低かった設問 | 3 三(1)ウ |
| ・もっとも無解答率の高かった設問 | 3 三(1)ウ |
| ・もっとも無解答率の低かった設問など | 1 一、三、
2 一、二 |

分析

東小学校の6年生の児童の正答率は全国に比べて、書くことに対してやや課題が残る結果が出ている。また、全体的に無回答率が全国の平均に対して非常に高い問題もある。特に漢字を使って書き直す問題は正答率が低く、無回答率が高い。

まとめて書く問題では、無回答率が全国より高い反面、正答率は全国平均より高い。その一方で、選択式の問題になると正答率が高く、大阪府、全国ともに平均を上回る結果となっている。

全体を通して、漢字の習熟度が低いこと、また、わからない場合は無回答である様子が見て取れた。今回のテストでは「積み」や「原因」など、頻出するような漢字が出題されていた。普段から漢字を使う場面を増やしていくことや、意味と結びつけながら学習する機会を増やしていくことが、漢字の習熟や、語彙を増やしていくことにつながると考えられる。

○●算数●○

(領域ごと)

①A数と計算	概ね良好な結果であった
②B図形	概ね良好な結果であった
③C測定	概ね良好な結果であった
④C変化と関係	概ね良好な結果であった
⑤Dデータの活用	良好な結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率) 概ね良好な結果であった

(その他)

- ・もっとも正答率の高かった設問 3(1)(2)
- ・もっとも正答率の低かった設問 2(1)
- ・もっとも無解答率の高かった設問 4(3)
- ・もっとも無解答率の低かった設問 1(2)(4)(5)
3(1)(2)(3)(5)
4(1)(2)

分析

東小学校の6年生の児童の正答率は、全体的に概ね良好な結果となっている。無解答率も低く、問題に前向きに取り組む姿勢が見受けられる。

問題形式としては記述式の正答率が低い傾向にある。記述式では正答の条件が決まっているので、解答の表現方法に課題が見られる。

また、短答式であっても、三角形の面積を求める問題の正答率が最も低い。直角三角形の面積の求め方や公式は理解しているが、三角形の底辺がどの部分にあたるのかを理解できていない可能性が大きい。同様に平行四辺形の面積を求める問題でも、図形を構成する要素である「高さ」を導きだすことができていないことが考えられる。

どのようなデータを集めるべきか判断する問題では、全国と比べて正答率が高い。問題文のような状況は、学級活動や委員会活動でも経験があり実体験との結びつきが大きい。棒グラフの読み取りの正答率も高い。

算数での学習が、日常生活場面にも多くあることを子どもたちが体験することで、学習への意欲の高まりが期待できる。

問題形式が短答式であっても、文章や資料から読み取る量は多い。読み取る力をつけていくことが、正答率の向上にもつながると考えられる。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

東小学校の6年生の児童の正答率は、算数については全体的に概ね良好な結果となっている。無解答率も低く、問題に前向きに取り組む姿勢が見受けられる。問題形式としては記述式の正答率が低い傾向にある。

国語については正答率は全国に比べて、書くことに対してやや課題が残る結果が出ている。また、全体的に無解答率が全国の平均に対して高い、解答時間が十分でなかったことも要因と考えられる。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

一昨年度と比べると無解答率が増加している。国語については、児童アンケートを見ると解答時間が十分でなかった等の解答をしている児童が多い。またそのことが、終わりの方の設問になっていくと無解答率が高くなったということにつながると考えられる。

エンパワー層は減少し、中位層が増えていることから学力の底上げができていていることが分かる。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

本校では、子ども同士がつながる場を作ることで、子ども主体の授業づくりを進めている。「問題解決学習」を展開することで見通しを立て、自力解決をし、考えを発表し交流することで考えを広め、深めてきた。特に算数は「問題解決学習」を定着させ、習熟度別授業、放課後寺子屋学習など少人数での学習により「分かる授業・指導」を重視してきた。また、「東小スタンダード」を児童に配布すると共に教師間でも共有して一貫した指導ができるように努めている。その成果もあり、算数への苦手意識の減少や算数の有用性を感じている児童も増加している。現在国語についても「東小スタンダード」を作成中である。

昨年度より、子ども達の「読む力」を養うために「読み取り書きまとめる力を育てる」をテーマに国語の研究に取り組んでいる。6年生については読み取る力に個人差があるので、コロナ感染防止に努めながら工夫をしてペア学習や、少人数のグループ学習で交流しながら学習を進めている。自分の考えや内容をまとめることを苦手としている児童もいるため、要約する練習や短文づくりにも取り組んでいる。また、国語科に限らず授業の中で、ペア学習、少人数のグループ学習を活動に入れ、自分の考えを「相手に伝える力」を身に着けることへの手立てを行っている。

本校では個に応じた指導をすべく、算数などでのスクールサポーターの活用や放課後寺子屋教室での個別指導にも力を入れ、基礎学力の底上げ、苦手意識の軽減を目指している。

また、「家庭学習週間」を設定し、宿題のチェックや自主学習の習慣化をめあてに家庭と学校で連携を諮っている。「家庭学習のてびき」をそれぞれの学年に合わせて配布し自主学習の用例（漢字練習や計算の反復練習、意味調べ、調べ学習、読書など）を提示することで、学年に応じて宿題だけでなく自主学習も行っているように働きかけている。

本校の児童は家庭での自由時間をインターネットの閲覧やゲームなどに費やす傾向があり、読書をする機会が減少している。読書が好きな児童もいるが、幅広く色々な本や情報に興味を持ってもらえるようにいろいろな取組みをしている。例えば、毎週読書タイムを設定し、図書委員を中心に読書をする時間を設定したり、地域よりキッズサポーターに協力をしてもらい、読書タイムを使って絵本などの読み聞かせを行ってもらっている。その成果もあって毎週の読書タイムを楽しみにしている児童は多い。読書週間には「おすすめの本」の紹介を全校児童で作成したり、図書委員会によるスタンプラリーなどの読書への興味関心を高めるような働きかけや各クラスに学級文庫を設置するなどして興味や関心が広がるような働きかけを行っている。